
土塊故郷行

みなきゆきなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土塊故郷行

【Nコード】

N0467Z

【作者名】

みなきゆきなみ

【あらすじ】

様々な種族が共生する世界。故郷を失ったヌシ・白狼と、彼の民であった娘・ウズメは、新しい故郷を探し、大陸を旅していた。故郷の最後の民の幸せを願う、白狼の旅路の行方は、果たして。

(サイトと同時掲載)

プロローグ 咆哮

母なる山が咆哮した。

地を突き崩すような震動が、白狼の住処である小さな祠を襲った。轟音が白銀の体毛を震わせる。預かっている赤子を己の使いであるオキナに任せ、白狼は石造りの鳥居の下に飛び出していた。

この数日降り続けている、針のような冷たい雨が、白狼の巨軀を容赦なく打ち据える。鬱蒼と木々が生い茂るこの場所からは、白狼が又シとして治める里の様子は見えなかった。

嫌な胸騒ぎが納まらなかった。

駆けた。ぬかるんだ山道が足先を冷やして感覚を奪い、はじけ飛んだ泥が美しい毛並みにこびり付いた。年老いた体は軋み、肺は酸素を求めて悲鳴を上げる。見開き、風に晒された鋭い瞳は、知性を持たぬ肉食獣のように血走っていた。荒い呼吸と共に、縋り付くような唸り声が鋭い牙の隙間から漏れる。

白狼が目指す先には、里を一望出来る切り立った崖があった。

ようやくの思いでそこに辿り着いた白狼は、警鐘のように激しい鼓動を落ち着けようと一息を吐いた。そして徐に首をもたげ、眼下の里を望もうと瞼を開く。

しかし、彼の知る里の姿は、そこにはなかった。

視界に入ったのは、里を呑み込んで唸りを上げる土色の濁流、ただそれだけだった。

戦慄する。体の冷えを唐突に意識した。瞬きを忘れた瞳が乾き、ちりちりと痛んだ。定まらない瞳孔が小刻みに震える。覚束ない呼吸が口元から漏れる。

里は、

里の者は、どうなった。

無謀にも飛び出そうとする前脚を、辛うじて理性が制止した。眼下で重く轟くような声を上げる土石流が、木々を岩を家を土を生き

物を、全て蹂躪して押し流していく。

白狼は吼えた。腹の底から沸き上がるような、体内に渦巻く感情を吐露するような、重く沈痛な慟哭だった。その巨大な躯体を冷雨の下に晒し、白銀の毛皮を泥土に染めて、振り絞るように白狼は哮った。されど、そんな悲痛に塗れた声を、濁流は容赦なく呑み込んでいく。

白狼は悔いた。大いなる自然を前にただ立ちつくすことしか出来ない、己の情けのなさを悔いた。どんなに声を張り上げても轟音に押し流されてしまう、己の小ささを悔いた。愛した里人を救うことの出来ない、己のあまりの無力さを悔いに悔いた。

衝動のまま、白狼は駆け出していた。

野を駆ける、山を駆ける。ぬかるんだ土壌の上を、倒れた巨木の上を、土を蹴り岩を蹴り材木を蹴って駆けに駆ける。体内に渦巻く衝動を、怒りを、悔しさを、情けなさを、払い吐き洗い流そうと、がむしゃらに脚を動かし続ける。ふと石に脚を取られ、泥濘の上を体を放り出す。それでもまた立ち上がり、拍子に口内に飛び込んだ土を吐き出して、白狼は再度走り出す。泥に塗れた毛皮に血が滲んでいた。雨に濡れ、ボロ雑巾のようになったその姿を、今や誰もかつての又シとは思えない。

感情に身を任せ、どれ程野山を駆けずりまわっただろうか。

雨はいつの間にか上がっていた。嘘のような静寂が訪れていた。疲労に蝕まれた体を引き摺り、朧気な瞳を彷徨わせていた白狼は、しじまの向こうに微かな泣き声を聞いた。

胡乱な顔をもたげ、重い脚を声の方角へと向ける。泥の色がする水たまりが跳ね、飛沫が毛皮に降り懸かる。されど、既にそのようなことを自覚する意識は残っていなかった。

泣き声は、白狼の住処である祠から聞こえていた。

幻聴かと思った。

されど、祠から出てきたオキナを見、白狼はその声が聞き違いではないことを悟った。

オキナの細い腕の中には、小さな赤子の姿があつた。里人に預けられていた、数ヶ月前に生まれたばかりの嬰兒だ。未だ自我を持たぬ赤子は、その存在を誇示するかの如く、肺を絞り上げるように声を張り上げていた。いつの間にか涙が零れていたことを、白狼はようやく自覚した。

未だ重く雲が立ちこめる空に、白狼は咆哮した。残酷なまでの静謐に包まれたかつての里に、染みいるように遠吠えが響き渡る。濃灰色の雲間から僅かな光が差し、荒れ果てた里を、崩れた里山を、生かされた白狼と赤子を照らしている。遠く彼方まで響くような声は、人の言う嗚咽と酷似していた。

このとき、白狼は決意したのだ。

この最後の民のために、己の余生を捧げようと。

それが、全てを失ったヌシに課された、生涯最後の役目だろうと。

頭上を仰ぐと、西南の空に仄白い半月が浮かんでいるのが映った。本日二回目上がる月、通称『昼月』だ。あの月が東の空に沈むまでには、今夜の野宿先を見つけなければならぬ。白狼はそう思い、歩を進める脚をほんの僅かに急かした。

そんな彼の背の上で、土で出来た小さな身体を転がす少女　ウズメは、己の背に植わった木イチゴに手を伸ばし、磨き上げたルビィのような鮮赤色の実を一粒摘んだ。日光を反射し、瑞々しく輝く小さな実を、無造作に口に放り込む。薄い唇が見る見るうちに窄まるのを認め、彼女の隣を歩く強い白髪の男は、表情を全く変えぬまま口を開いた。白狼の背に乗るウズメでさえも更に見下ろしてしまふ程の長身が、彼女の上に影を落とす。

「酸いか」

「酸い！　おじじ様もお一つどうじゃ？」

「よい」

「むう、白狼様は如何じゃ？」

幼い顔立ちを歪め、ウズメは白狼に視線を投げかけた。白狼は微かに困ったような素振りを見せ、控えめに首を振って返す。

共に旅を始めて六年も経つのに、ウズメは未だ、白狼と白髪の男が同一の個体であることを理解出来ずにいる。

白狼と『おじじ様』と呼ばれた長い白髪の男　その名に違い、彼の外見は成人を過ぎた程の齢に見える　は、言わば傀儡師とその人形のような関係にある。傀儡師が白狼で、人形が男だ。又シとして人里を治める、白狼ら獣の一族は、民と意思疎通を図るため人型の使いを生み出し、使役する力を持つ。使いに自我はなく、その感覚は本体である獣と共有される。

何度そう伝えても、幼いウズメはその話を理解出来なかった。だから便宜上、白狼が操る人型の使いは『オキナ様』『おじじ様』、

白狼はそのまま『白狼様』と呼ばれることになっている。年若く見える男がジジイと呼ばれる所以は、外見の何倍もの時を生きている上、白狼が操るが故に口調や仕草が年寄りめいているからだろう。

「それにしてもおじじ様、いつになつたら次の里が見えてくるのじや？ ウズは疲れた。ずっと歩くだけの旅も悪くはないが、これだけ続くと飽いてしまう」

真つ赤に汚した口を尖らせて、ウズメは白狼の広い背にごろりと腹這いになった。白い毛先が鼻をくすぐるのか、むず痒そうに短い眉がひくついている。

「もう少し辛抱せぬか」

「またそれじゃ！ 辛抱辛抱辛抱辛抱、ウズはもう聞き飽いたっ」
握り拳で数度背を叩かれて、思わず白狼は呻き声を漏らした。

「前の里を発つてから四日、ウズはもう十分すぎる程辛抱したわ！
山道には飽いたし野宿にも飽いた！ ウズはもつと色んなところを見たいのじゃ！ それに白狼様の毛皮はちくちくしてて寝づらいからもう嫌じゃ！」

毛皮の上質さには自信があつた白狼は、その言葉に少なからず凍り付く。だがしかし、彼女の言葉が恐らく勢いに任せた空言であることを、彼自身何となく察してもいた。

ウズメは今年で六歳になるが、その歳にしては子供っぽい一面があつた。彼女ら土の一族は八歳で成人を迎えるため、通常彼女ほどの歳になれば少なからずそれを意識するようになる。背に植えていた木イチゴや野ブドウをある日突然引っこ抜き、一丁前に異性を意識したアヤマやヒナゲシなどを根付かせてみたりして、周囲の大人に「あらあらこの子つたらませちゃってうふふ」等とからかわれるのはこの時期の誰もが通る道だ。

なのにウズメは、この歳になつても大好物の木イチゴを幾種類も身体に植えつけており、色気づく気配など有りはしない。身体の発達も遅れていて、同じ年の子らは既に彼らの本体である土塊をほとんど肌で覆っているところ、彼女は未だ腕や足等に柔らかな土を覗

かせていたりするのだ。

その理由の一端は、自分にあるのだろうか。

そう思い、白狼は僅かに視線を落とす。

ともかく、そんな精神的にも身体的にも幼いウズメは、感情を制御するのが人一倍下手くそだった。特に腹を立てたとき、その悪癖は顕著になる。だから、彼女が白狼自慢の毛並みをちくちくするなどと宣ったのも、興奮に我を忘れてついぼろりと出任せを口走ってしまっただけに違いない。そうに違いないのだ。

念のためにオキナの指先で毛皮の感触を確かめながら、しかしと白狼は頭上を仰いだ。

彼女の言い分も尤もだった。前の里を発ってから四日、ずっと鬱蒼とした木々に覆われた山道を歩いていることに、些か気が滅入ってはいた。踏み鳴らされていない地面は足を痛ませるし、起伏に富んだ険路は必要以上に体力を削ぐ。昼間はほんのりと汗ばむような気温も、夜にはがくりと下がり、二人と一匹が身を寄せ合って眠っても薄寒さを感じる程だった。

「確かに、この行程は些か辛いな」

「じゃろう!？」

目を輝かせてがばりと上体を起こすウズメに、しかしオキナは冷淡な視線を送った。

「されど辛抱する以外に選択肢はあるまい。儂はただのヌシの落ち零れ、まさか次の里を呼び寄せるなどという馬鹿げた芸当が出来るとも思っておるのか」

「うっ、……ま、まあそうなんじゃがっ」

「それにこの我が儘娘は、白狼めのもふもふの毛並みを気に入らぬと言うのか。ならばこの先ずっと、白狼の背から下りて自分の足で歩いてもらうても構わんのだがなあ」

「〜分かった! おじじ様と白狼様の好きにすれば良かる! ウズはもう知らぬっ」

じたばたと捨て台詞を吐いて、ぼすんとウズメは白狼の銀系に顔

を埋めた。悔しそうな呻きが僅かな顔の隙間から漏れている。

オキナの視界を使い、白狼は己の背面で横たわるウズメの、その土塊で出来た小さな体を見据えた。腰に届きそうな程に長い、白砂を彷彿とさせる色合いの髪と、その下に覗く若葉色の衣。白い肌の合間からは、ところどころ黄土色の土が顔を出している。彼女の本体である土の上には、棘のついた木イチゴの枝と小さな雑草、それに薬草の類が幾本か根付いていた。琥珀色の丸い瞳は、顔を伏せているため今は見えない。

やはり、同年代の子供に比べ、身体の発達が極端に遅いように見える。生まれた土地の土をほとんど取り込めなかったことが災いしたか、或いは旅に出て一定の里に留まっていけないのがいけないのか。白狼は懸念に眉を潜ませる。

ウズメは、かつて白狼が治めていた里に生まれた娘だった。

そしてその里は、今はもうない。

忘れもしない、六年前のあの夜。三日三晩続いた豪雨の末、母なる里山は山崩れを起こし、小さな里は敢えなくそれに呑み込まれたのだ。

ウズメら土の一族の本体は、その名が示す通り土塊である。その為、彼らは土に取り込まればそのうちにそれと同化してしまう。

故に土石流に呑み込まれた里の民は、皆が皆泥と濁流の中に埋もれ果ててしまったのだ。

生き残ったのは、里から離れた白狼の祠に預けられていた、生まれたばかりの赤子。すなわちウズメ、ただ一人だった。以来二人と一匹は、朽ち果てた里から離れ、あてのない旅を続けている。

しかしやはり、このままではいけない。このまま旅を続けていては、元々土着の民であるウズメの成長に支障を来してしまう。ウズメのために、彼女が移り住むことが出来る里を、白狼は長い間探し求めているのだった。

繁茂する木立の彼方から、一筋の光が差した。延々と続く山道も終わるか、それともただの木々の切れ間か。白狼は一つ息をつき、

歩を進める足に力を込めた。

そのときだった。

「あら、珍しい。獣の一族と土の一族が旅をしてるなんて、始めて見たわ」

突如上空から聞こえてきた幼い声に、白狼は意識を奪われる。

オキナの首を回転させ、背後の空を仰ぐ。視界に入ってきたのは、純白の日傘を差し、こちらを見下ろすようにして宙に浮かんでいる、一人の少女だった。

歳の頃はウズメより一つか二つを多く数える程度だろうか。未だ幼さを残す顔立ちに、勝ち気そうな水色の吊り目が眩い。背後からの風に煽られて揺れる長髪は、真夏の空のような鮮烈な青色をしていた。頭の頂きから二本、髪と同色の、されどそれにしては太い糸が垂れ下がっているのを見、白狼はその怪訝げな表情を正す。

気流を読む二本の触覚は、雲の一族の特徴だった。

彼女の声に反応し、ウズメは威勢よく上体を起こす。頭上に少女が浮かんでいるという光景に、一瞬目を白黒させるも、どうやら彼女も少女が雲の一族であると理解したようだ。その琥珀色の瞳が、見る見るうちに好奇心に溢れた輝きを帯びてくる。

そんな子供らしい落ち着かない仕草に、雲の一族の少女は少なからず興味を抱いたらしい。少女は強気そうな笑みを浮かべながら、日傘を回してウズメの前方へと降下する。

「あら、可愛いお嬢ちゃんね。木イチゴを植えてるってことは、四歳くらい？」

「しつ失礼な！ ウズメはもう六歳じゃ！」

ばんばんと平手で白狼の背を打ちながら、ウズメは嘔みつくようにして抗議した。その言葉が全くもって意外だったのか、少女は目を数度瞬かせ、取り繕うように笑顔を作る。

「そ、そうなの？ それにしてはちっちゃいように見えるけど……旅人であることに関係があるのかしら。じっくり話を聞かせてもらいたいわ。もし行き先があれば、私たちの旅団に同行しない？」

「旅団？」

「飛鳥旅団、つて言葉をご存知かしら？」

表情をそのままに小首を傾げる少女に、ウズメは軽く首を振って応ずる。その隣で、沈黙を保ち続けていたオキナが徐に口を開いた。「飛鳥を風に吹かせて旅をする、行商人の一段のことだろう」

「あらお兄さん、博識ね」

オキナの低い声に、少女は嬉しそうに鮮やかな水色の瞳を細めた。こんな形でも自分は長い時を生きた老爺であり、その上元とは言え又シである。里に関係のないことでも、ある程度学はあるつもりだと、白狼は小さく息を切った。

「そう、私たちは飛鳥と共に世界中を旅する行商人。ただ旅をするだけだとつまらないから、時々気に入った人を目的地まで運んであげたりもするの。あなた達なら、旅団の皆も喜んでくれると思うわ。私たちはこれから東へ向かうのだけど、良ければご一緒しないかしら？」

元々、行くあてもなく放浪する旅だ。行き先など特に決まっていらない。

「行きたい！！」

間髪入れず返答したウズメに、少女は満足げに首肯する。

「ですって。お兄さんはどうかしら？」

「……旅費が気になるな。儂らには纏まって払える銭がない」

「あら、そんなもの要らないわよ。私たちはお客さんに娯楽を求めてる訳だし。旅の面白い話でも聞かせてもらえたら、それだけで充分だわ」

日傘を斜めに傾げ、少女は風を受けて高度を上げる。常人と比べると頭一つは抜きん出るオキナの長身に目線を合わせるようにして、少女は衣服の裾をはためかせながら上体を傾げた。

「さて、如何かしら？」

迷う要素はなかった。それに、各地を旅している旅団の面々と触れあえるのならば、己の旅の目的に、一歩近付くことが出来るかも

しない。

「……ならば、お言葉に甘えさせてもらおう」

「やったー！ 空の旅じゃ！！ 退屈な山道を耐えた甲斐があった！」

仄かに相好を崩す白狼の上で、ウズメはその小さな両手を空に掲げてみせるのだった。

突風を日傘で捕らえて浮き上がりながら、少女はその細い指先を胸元に当てる。

「ご同行ありがとう。私は飛鳥旅団の雇われ雲編み師、アナンよ。

正確には、アナン・ワラークラ・ア・ドウオルク。よろしくね」

名の後に一族名をつけるのは、西の大陸に流布する神光教の習慣である。西の大陸被れの少女は、自信に満ちた笑みを浮かべたまま、軽く低頭してみせたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0467z/>

土塊故郷行

2011年12月2日21時53分発行